

大抵の人々の記憶にあるものはこうゆう面が多いと思うが、あまり皆の御存じない二、三の思い出を書いてみたい。何処の高等学校でも第一回生は相当偉物の多いものであるが先生の同期も多士済々であつたらしい。その中であつて弊衣をまとつた応援団長が若い日の小野先生であつたと聞いて、あの実直な先生からは想像も出来ないことだつた。しかし、「時局柄、若い連中の乱暴を取締らなければならんのはつらいですよ」と私に時々もたらされていたのも何だかわかる様な気がする。

九大の解剖講座を担当する様に招聘されたのは戦争も末期の頃だつたが、第三解剖（人類学）が設けられることを確約された学長の要請で占まられることになつた。人類学の講座の準備も着々進められて居り、現在私の手元にある「人工変形頭蓋概説」も講義のために印刷されたものだ」と記憶している。

朝鮮に渡り、支那を歩き随分龐大な人類学研究のデータが集められていた。学生であつた私にはその内容などわかる筈はなかつたがその量に目を見張つたものだつた。東大の理学部に学位論文（数計学）を出す様になつていて、遂に先生の手の中で焼失してしまつたのであろう。

先生も奥様も私と同じ土佐の寒村の出身であり、学生の頃は事あるにつけ面倒をみて下さつた小野先生。お別れして既に十年の歳月が流れ去つた。今思い出も新たに少しばかりの面影を綴りました。

（病理学教室勤務）

生理学教室

当時の教室員は清原寛一教授、芦塚陽助教授、崎元行夫助手、橋田数綱嘱託、西村ユキ傭人、それに定夫の崎田関一氏であつた。

被爆時の状況

清原教授、芦塚助教授、橋田嘱託、崎田、西村氏は教室内で爆死。崎元助手は家野町の寄宿先で受爆、負傷して大村海軍病院に收容さる。

故清原寛一教授略歴

従四位医学博士 生理学教授

明治三十八年二月十五日福岡県に生る

昭和三年三月長崎医科大学卒業

同年同月 長崎医科大学助手に任ぜられ生理学を専攻す

昭和八年十月長崎医科大学助教授に任ぜらる

昭和十四年七月満洲国及び中華民国に出張を命ぜらる

昭和十四年十月長崎医科大学教授に任ぜらる

昭和十八年三月陸叙高等官三等

昭和二十年八月九日大学に於て原子爆弾に遭ひ即死転に殉ず

主なる研究題目

光力学的作用に関する研究。

死亡者の官職並びに氏名

官職	氏名
教授	清原 寛一
助教授	芦塚 陽
嘱託	橋田 数綱
備人	西村 ユキ
定夫	崎田 関一

原爆に潰滅した

生理学教室員を悼みて

崎 元 行 夫

昭和二十年の初め頃の生理学教室員は清原教授、芦塚助教授、筆者、橋田氏それに小使の崎田氏の五人であつて、外に応召中の野間、玉井、須藤各氏の名札が掛つてはいたが陣容としては他の教室に較べて決して少い方ではなかつた。当時大学生百名、附属医専二百名に講義せねばならなかつたため、清原教授は殆んど毎日四時間位の講義を受持つておられ、芦塚氏並に私が医専の方の加勢をしていたのであるが、医専は二班に分れて同じ講義を二回宛行つた為め講堂は入れかわりに「B」に使用されていたと云つても過言でない。併し夕方警報解除の後ではよく教授や小使も一緒に手製の煙草を喫ひ、僅かの人造酒をちびりちびりやり乍ら雑談に耽つたりしたものである。或日素晴らしく見事な茂木ビワを一籠誰か

らか戴いたので五人は例の小使室に集り腹一杯ありついたが其の時「あゝこんな素晴らしいビワは之が食べ納めかも知れないな」と呟いた。一瞬不気味な気分が辺りに漂つたが、いかにも予言者を気取る橋田君らしい思い切つた一言であつた。橋田君はかつて思案橋の手相見がよく当るから行けと再三私にすゝめて呉れたが、それがよく的中するのに全く感心していた程無邪気で善良な方だつた。今頃の世間では中々得難い人材であつた。飄々として身軽く廊下を歩いていた芦塚助教授も当時は中々元氣であり、軍医予備員訓練も受けてこられた程であつた。「私の肺には両側共こんな大きな空洞があるのですが平氣ですな」と両手を夫々左右の胸に当て指で円い空洞をつくつて得意であつた。小使の崎田氏は六十才位に見えたが煙草好きと見え山いちごの葉と配給の葉たばこ半々に混ぜ倍量にして喫つていた。

教室員は僅かであつたが親しさは又格別であり何等遠慮も固苦しさも無かつた。併し其れも開け放して親分肌の清原教授だつたからそんな事も許されたのであろう。清原教授の御家族は幼稚園の御長男及三才位の御嬢ちゃんがおられ、奥様も当時御健康相に見受けられ、一家睦まじく城山町の自宅に住んでおられた。正月橋田君と共に御宅に招待されたが、すべて奥様のお料理であり美味しい御雑煮、芳醇な日本酒等全く豪華版であつた。併し之が最後の記念すべき御招待にならうとは神ならぬ身の誰も知るよしも無かつたのである。

教授以下私等は講義の準備に多忙であつたので帰りは毎日おそくなつたが、二階から先生のお帰りの靴音がするときまつて私の室の前で降り一緒に帰ろうと誘われた。大学の中庭を裏門へ抜けて山里の本通りを下

り、山里小学校を経て大橋で二人は別れ先生は城山町へ、私は家野町へ帰るのが日課の様になつていた。

途中戦況其の他四方山の世間話は勿論の事、教授会の模様迄差支え無い範囲で話して下さつたので私も長い帰途の疲れも忘れて楽しい時間であつた。或日小学校の横に差ししかかつた頃こんな事を話して下さつた。

「僕はいつも家内に云うのですが子供だけ残して死ぬ事があつてはならぬ、死ぬ時は皆一緒に死ねと云つていますよ」。其の御言葉通り御家族三人は御自宅で遭難され先生も学校で御遭難と云う、何たる悲劇である。又或日こんな話をされた。「君も家族を呼んで一緒に住みませんか、家と食料は私がなんとか世話出来ますよ」。之は原爆教日前の事であり、人は寧ろ郊外へ、田舎へと避難する折だつたから今から考えてみると先生は余程覚悟を決めておられたものと思われる。学校でも民間にならつて「防火策」として繋廊下を取り外す事になり、生理学教室でも教室員竝に防衛に割当てられた学生十名位によつて、南の教室から北の実習室へ行く廊下の屋根、壁を取り壊した。又重要実験器具、図書を佐賀へ疎開する事になり、教室でもわか作りの箱に納めて送つた。教授は現在不必要なものだけ疎開すると云う御意見だつた。先生にしてみれば仮令死んでも学校、重要器具、図書とは離れ度くない強い御決心の程が伺われ悲壯であつた。

六月中旬私は先生のお奨めにより一週間の予定で最後の休暇を戴いて帰郷したがその前日に自宅は焼失していた。此時地下一尺に埋めた品物が火災に安全であつた事を先生に申し上げた所、早速重要薬品の一部を生理講堂地下に埋める事にされた。瓶入りの薬品に水湿からレットル

を守る為教授の指示により墨汁で書き直し、その上を流動パラフィンで塗つたが、翌年五月法医の徳川助教授と之を掘り返して見て、水中に浸つていた之等薬品瓶がレットル、内容共に無疵であつた事に驚嘆し先生の先見の明あるのに敬服した。

二階図書室にあつた金庫は六人担ぎで辛じて階下動物室へ運び、教室員に一部個人的使用も許されたので各自原稿や現金等を入れた。併し翌年二月私が全快して帰学した時は已に無断で開かれ、内容は荒され講義の原稿のみが散乱して残つていたのには驚いた。教授の原稿の一部は私が形見に保存しておるが、あの達筆で特長ある御筆跡は先生の面影に接する思いがする。

教室内の防災措置をなす一方、学校では全職員交代で図書館裏に横穴を掘り始めたが戦局は益々逼迫する事として皆懸命に付き、またたく間に出来上り、確か八月一日であつたか長崎市初空襲の折は早速之が役立ち我々は念仏を唱え乍らこの壕内におびえた。此の日は教室の化学実験室天井に径二尺位の大穴があげられ、不発弾ではあるまいかと恐る恐る調べたものであつた。実験室のアルコールは随分ねらわれていたもので「メチルアルコール」のレットルを貼つて盗難を防ぎ、又一斗入りアルコール缶二個も奥深く仕末した。

当時街にはリングル液が不足したので急救の患者に二、三回提供した事もあつた。当時実験用薬品は充分であつたし、ガマ、カエルは中庭の飼育池に多数いたが兎は不足した。七月頃だつたか学生二、三人が来てカエル二十匹位研究用に戴けないだろうかかと相談に来た。その後も又二回程来たが勿論私は喜んで之を提供した。之が当時彼等学生にとつて唯

一の動物性蛋白質養源になる事を私は直感したからである。仮令敗戦後とは云え今日の学生は斯の如き悲惨な食料難は御存じないだろう。当時の長崎医大学生は止むを得ず必要にせまられてガマやカエルを食用に供せざるを得なかつた程窮していた。而もその揚句は殆んど全学生が空腹の儘原爆の犠牲となつて倒れたのである。食料難は学生のみならず職員も同様であり、眼科教室の台湾出身某君からは度々電話で実験使用後のガマ、カエルの寄贈を頼まれた。我々生理教室でもガマ、カエルの骨格筋や肝臓を塩焼にして食つたが、肝臓はザラザラ砂を嚙む様で気味が悪かつた。又橋田君はガマから散薬を造つて之を常備栄養剤と称して机の上に置いて呉れた。即ちガマを中庭の木の枝に刺して、充分乾燥後之を粉碎器にかけ更に篩にかけて気付け薬としたものであつて私も毎食後之を愛用したものだ。又新鮮な牛の血液を材料に冷凍羊羹を造つて呉れたが之は私の口にはとても合わなかつた。

此の様に戦局重大な中にも屢々大講堂から美しいピアノの音が無気味なしじまに溶け入る様に流れて来るのであつた。久しく我々から失われている希望と喜びが晴れやかに湧き出で、戦いに疲れ果てた心身に生気が蘇る思いがして陶然として之に耳を傾けた。当時の一年生にはピアノに堪能な者が三人程いて「トルコ行進曲」、ウエーバーの「舞踏への勧誘」、ショパンの「葬送行進曲」等を好んで弾いていた様だつた。

八月になつてからは警報はひつきりなしに出て其の度毎に講義は中断され、各人は直ちに夫々の部署についた、そして全職員、生徒の頃から笑いは失せて頬の肉は落ち何か一大事の予感におびえるかの如き真剣な顔貌を呈し悲壮な決意が見られた。

福田助教夫人が御子さんをおんぶして校内防空壕へ走りこまれる御姿、金子教授が防空壕用の材木を担いで裏山の方へ行かれる御姿が忘れられない印象となつて残つている。私が清原教授に最後にお会いしたのは、原爆前日の夕方であつたが相変らずとも御元氣であつたし、橋田、崎田両君共に元氣だつた。芦塚助教は前日は諫早へ行くとして休暇をとつておられ私は原爆当日休暇をとつた事が運命の岐れ目となつた訳である。

即ち清原教授、芦塚助教、橋田氏、崎田氏は教室内で見ても悲惨な最後を遂げられ私は家野町の寄宿先で遭難したが幸にも約十分後には倒壊家屋の下から這い出る事が出来たのである。然し鼠蹊部の大血管を破つたらしく出血甚しく、三十分位路上に坐つた儘出血部をおさえて生命を守るのに死物狂いであつた。漸く周囲の火の海から逃れ、鉄道を直角に横ぎり射撃場へ出て更に迂回して城山町の清原教授宅へ向つた。出血と意識昏濁とに死物狂いで打ち勝ち乍ら夕刻やつと城山町の裏手へ出たが、城山町一帯が全く灰燼に帰しているのを知り茫然自失、其の儘丘の上よろめき倒れた。

眼科森路先生の知人と云う名も知らない親切な人がバケツ一杯の水と菓子器を貸して下さつたので之を飲んで目を開き、睡気が襲つて来れば舌を嚙んで之に打ち勝たねばならなかつた。睡気の急負傷部をつまんだ手を緩めて仕舞い其の度毎に血糊の為手指が滑り止血困難な事が数回あつて一人で死闘を演じた。絶望に陥り目を閉ぢるかと思うと又振いたつ生命への欲望が蘇つて来る。誰でもいい、知人の所へ行き度い、そして死ぬものならせめて誰か知つた人の下で死に度い。虫けらの如く埋れ

で死に度くない。故郷の人々の顔がぼんやり浮んでくる、然しどうにもならない無気力さを如何とも出来ない。なるが儘よと捨鉢になる。又生き延び度い欲望が甦つて来る。かくするうち漸く意識が正常に戻つて来るのが自分にも分つて来た。誰やら叫んでいるのが聞えた。「下山しろ救援列車が来る。」

落ちていた棒切れを拾い、杖にすがり乍ら一步一步と線路へ下りて待つ中に果して救援車が目前に停車した。狂喜して之に乗車させて貰うと漸く襲い来る安心感のせいか欠呻が出る、睡気が襲う、然し私は鼠蹊部の手を緩めてならない。その中嘔気がくる。あちこちの患者は泣き叫び或は嘔吐を催す。夜おそく列車が大村駅に着くと待つていたトラックに移され、忘れもしないあの物凄く冴えた月光を浴びて漸く海軍病院へ收容された。直ちに全裸にされ、クレゾール液で全身を拭き破傷風血清らしき注射を二本受けた。

教授と特に親密な間柄の須山弘文軍医が御勤務の事をかねがね承つていたので直ぐ連絡を頼んだが中々通じて貰えなかつた。数日後庭でふと知り合つた栗原飛行少尉の御厚意で須山軍医との連絡もなんの事もなく出来、それ以後病棟勤務の職員は私に対して特に懇切丁寧であつた。

毎日37.5°C乃至38.0°Cの熱があつて食欲もなかつたが須山軍医をはじめ入院加療中の栗原飛行少尉、芝克彦軍医大尉の御厚情は生涯忘れる事が出来ない。長崎の情況は毎日救援隊によつて齎らされたが長崎へ帰る事等もつての外だとの事で一応郷里へ帰る事にした。途中大村市御開業の松尾先生(須山軍医の義兄)にお世話になつた上汽車に乗せて戴き人吉市へ向つた。人吉で三ヶ月静養したが、この間一時全く重態に陥り絶望

とあきらめたがどうやら切り抜ける事が出来た。眼科の小笠原長秋軍医が丁度人吉陸軍病院付であつたので一方ならぬ御世話になりお蔭様で容態も日増しに快方へ向つた。秋風の立つ十一月になつてやつと鹿児島に帰着したがその後更に四ヶ月間静養せざるを得なかつた。

二十一年二月末大村市の大学へ帰つてみると衛生の原先生、病理の若原先生、法医の徳川先生等が已に勤務しておられたが設備や図書は殆んど無かつた。その中、間もなく諫早へ移転する事となり雨の中をトラックにゆられて大村を出て行く時は悲痛とも残念とも例へ様の無い複雑な胸のつまる思いだつた。衛生の原先生が海軍の前歴に物言わせて基礎教室の設営に骨身を惜しまず献身的に仿いて下さつた御努力は忘れてなるまい。又教室の整備に當つて当時学生であつた岡野君が色々と加勢して下さいまつた事もこの誌上をかりて厚く御礼申し上げる。

かつて空襲下慌だしく、やれ防災の、やれ疎開荷造りと苦しみを共にした人々を偲びつつ私は痛々しい思いに耐え忍び乍ら震える手で疎開荷をほだいて整理していると、見覚えあるキモグラフィオン、感応コイル、解剖器具等で来る度に、之にまつわる数々の記憶や思い出がまざまざと甦り、思わず無念の涙に咽んだ。そしてせめて亡くなつた教室の方々の御意志をくんで残務整理だけは心置なくやつておき度い熱意に燃えて整理に務めたが、満足な事が出来なかつた事は残念であつた。

五月末清原教授を始め犠牲になられた教室関係の御霊を弔ふ追悼会を諫早市天祐寺で挙行したが、住垢の娘さんも当時生化学教室ラボランチンとして敢無い最後を遂げられた由にてその供養も合せ盛大に行つて戴いた事はせめてもの慰めであつた。当日の集りは芦塚助教未亡人並び

に御子さん、橋田氏未亡人、井沢、松尾教室先輩、齋藤助教、徳川、若原各助教、生徒有志であつて、終つて書院で有志寄贈の握り飯、ジヤガイモで故人を偲んで色々と御慰めや懐旧談に時の経つのも忘れた。何分短時日間の計画であつた為連絡もれの先輩があつた事が分り洵に申訳無かつた事をこの紙上をかりて深く御詫び申し上げます。

其の翌日は教室を辞して帰郷したのであるが、数日後には田中育郎氏がおみえになつた事を知り、草葉の蔭で清原教授も嘸御満足の事と心ひそかに喜びを禁じ得なかつた次第である。

終りにのぞみ清原教授以下教室関係犠牲者の御冥福を心からお祈り申し上げますと共に、願くばいつまでも我が生理学教室の守護神として後輩をお導き下さる様祈念する次第である。

(鹿児島市立病院)

清原先生の想出

井 沢 正 三

故清原教授は私にとつて佐賀高等学校の先輩でもあり、又大学では生理実習を教えていたゞいたり、更に音楽部の先輩であられたので、学生時代からよく存じ上げて居りました。卒業後、高井、亀谷両君と共に生理教室へ入る事が出来た時は、三人共全く有頂天になつたものでした。蓋し心から尊敬し崇拜して居た緒方教授と清原助教の下で研究が出来る様になつたからに外なりません。クルズスが済むと直ぐ私は清原先生御

指導のもとに組織呼吸の仕事をやらせていたゞきました。清原先生と御一緒にさせていたゞいて特に感じた事は何よりも先づ先生の明晰そのものの如き頭脳と、飽く事なき努力の蓄積で、それは正に驚異的なもので、暫く教室に居ると、とても我々凡夫のよくする処で無ないと云う事がよく解りました。先生の助手、助教時代を通じて生理学の多方面に亘る沢山の御研究が発表されて居りますが、昭和十四年本学出身の最初の教授となられてからは、各種イオンの生理学的検索と言う膨大なテーマと取組まれ、一步一步と確実な研究を進められ着々とその成果をあげて居られた様でした。原爆の為に先生が夭折されたと言う事は、生理学界の為に、長崎医大の為に非常に残念な事でした。

先生は学者としてばかりでなく、その人格、見識も抜群であり、又政治性、実行力等稀にみるものであられたので、若し生き永らへて居られたら大学の再建には、恐らくは学長として不屈不撓の御努力を惜しまれなかつた事と思ひます。

原爆の数日後私は救護班員として佐世保より長崎へ参りましたが、楽しい七年間を過したあの懐しい生理教室は人も建物も全部灰になつて居りました。あれから十年経つた今日、目を閉ちて当時を追憶して見ますと、地球最後の日を思わせる様な原爆の凶の記憶よりも、不思議と清原先生の幾分おどけた様な、あの人懐つこいニコ／＼した温顔が臉に浮んで参ります。

(高知県香美郡山田町在住)